

# No. 1209

## 春

はるか南のさわやかな香をのせて、イギリスの客船、クイーン・エリザベス二世号がやってきた、いよいよ春の観光シーズンの到来だ。東京多摩川の流域には春の訪れと共に北へ旅立つ、ユリカモメやカモ、コサギたちがなごりを惜しむかのように川面を飛んでいる。

花の絶えることのない鎌倉。しょう酒な仏殿のまわりには紅梅、白梅が咲きみだれ清潔な境内にゆかしさをそえている。もう時は春である。

## 筆づくりの町

— 愛知・豊橋 —

最近、書道をする小学生が増えています。書道塾も満員の盛況ぶり。愛知県豊橋市、この町で筆がつくられていることは、案外知られていない。しかし全国で生産される筆の約3割をしめ、その歴史もかなり古く、170年ほどになる。いまま町の通りには昔ながらの筆店が何軒かのきを並べている。

繊細な技術を要する筆づくりはまず毛の材料選びから始まる。馬、羊、いたちなどの毛が筆の種類によっていねいにより分けられる。毛は何度も交ぜ合わせられて、形をそろえられる。金櫛できれいにすき、毛先の悪いものを取り除く。永年の経験による勘と目によってすかれた毛は一本分の大きさに分けられて形づくられていく。どこの店も家族みんなで作業の役割がきまっている、軸は小刀で適当な大きさに調節される。根本の部分を麻糸で整えられた穂は軸にひとつひとついねいにとりつけられる。仕上げは穂を糊につけ、一本の糸を巧に繰り形をつくっていく。この作業には10年以上の年季が必要だという。ボールペンの普及などで前途をあやぶまれていた筆。しかしその穂先がかもし出す落ちついた味わいが筆の伝統を守りつづけています。